

溜池の鳥と魚の密接な関係 ～ヨシゴイ・カンムリカイツブリ対モツゴ～

講師：佐原雄二

弘前大学農学生命科学部生物学科 教授



ヨシゴイとカンムリカイツブリはどちらも溜池で繁殖する魚食性の鳥で、ともに環境省のレッドリストに入っていますが、前者は減少傾向にあるのに対し、後者はむしろ増加傾向にあるとされています。溜池の魚との関係から彼らの生態を調べる中で、両種の共通点が見えてきました。

青森県津軽平野の溜池群に生息する魚種の中でも、コイ科の小型魚モツゴは多くの池で見られ、個体数も多いものです。近年のオオクチバス（いわゆるブラックバス）の密放流はモツゴなど在来の小型魚を激減させました。しかし、溜池の中でも夏季にヒシなど浮葉植物が水面を覆ってしまうタイプの池では、水中が著しい低酸素状態になり、酸欠に弱いオオクチバスはこのような池では生存できないのに対し、モツゴ、メダカ、フナ類、ドジョウなどの在来種は酸欠に強く、生きていけます。中でも、扁平な頭部と小さくて上向きの口を持つモツゴやメダカは「水面呼吸」を行うことで、厳しい低酸素の時間帯を切り抜けています。

水面下にいる魚を上から見つけてとるヨシゴイの場合、小型の魚が水面付近にまで浮上していることが必要です。浮葉植物の繁茂する「酸欠タイプの池」ではたとえオオクチバスが放流されても増えることができず、モツゴの生存を保障するうえに、モツゴは酸欠の時間帯には水面に浮上するのでヨシゴイには絶好の採餌条件を作り出しています。

一方、カンムリカイツブリはヨシゴイより体サイズがずっと大きいうえ、潜水して魚をとるので、モツゴの生息や酸欠が関係あるとは一見思えません。しかし、青森市にある溜池での研究から次のことが分かってきました。

この池にすむ魚は実質的にモツゴとフナ（ギンブナとゲンゴロウブナ）の2種類だけですが、例年カンムリカイツブリがヒナを4羽あるいは5羽育て上げており、年によっては2回繁殖しています。本種としては非常に高い繁殖成功ですが、それをわずかに2種類の魚が支えているのです。ヒナに給餌される魚のサイズと種類とを調べると、孵化直後のヒナの餌として小型で紡錘形の体型を持つモツゴの重要性が分かりました。

カンムリカイツブリが繁殖する池はたいてい大きくて開水面の広い池ですが、このような池はオオクチバスが放流されると容易に定着し、モツゴなど在来魚種の激減を招来します。現在は増加傾向にあると評されているカンムリカイツブリですが、決して今後が明るいとは言えません。実際、繁殖状況の悪化する兆候が表れ始めています。

●講師プロフィール

1949年兵庫県生まれ。理学博士。弘前大学農学生命科学部教授。魚類の生態・行動と魚食性鳥類の生態・行動を、野外観察と室内実験とから調べている。

日時：平成24年11月3日（土・祝） 午後13時30分～15時00分

場所：アビスタ（我孫子市生涯学習センター）ホール

主催：我孫子市鳥の博物館・（公財）山階鳥類研究所